



威

日本

九州

朝鮮

蝦夷

唐

唐

海

滿州

西

ツアラレマートイ

テモツナサト

ホロモシリ

朱元
智齊世國人近年日本
屬嶋上諸海嶋名攷正

チホツカ

タラスコイナホ

タムスカコイ

トホロト

トコホシカ

トコホシカ

トコホシカ

トコホシカ

ツアーストロフ

北

經緯度數之辨

南北進退之距緯度數者赤道以北赤道以南之度數也復
 北極出地之度數南極出地之度數亦同又東西進退之距經度
 數者亞天利加州之內テ子リカアン島之内也界第一高山用ヒ
 一コ為東西經度之初點因是起ヒ一ゴ以西ヒ一コ以東之度數依
 於此ヒ一コ超初度初點而終周天三百六十度也
 東西之經度數記于南北之緯度南北緯度數記于東西之
 經度假令真列南部矢起村正北之海中凡三十里所在距赤道正北緯四十
 一度記之經度北極出度亦四十二度也
 寬政二年庚戌季秋下弦 本由三郎右衛門利明撰

經緯度數之辨終



西蝦夷

東蝦夷



Handwritten Japanese text in the top right corner, including characters like 'イロカ', 'ホニホロ', and 'クニニシロ'.

Handwritten Japanese text in the top left corner, including characters like 'チカフサイ', 'キナカイ', and 'ルヘウ'.

Small handwritten notes in the top left corner, including 'シロ' and 'クニ'.

Extensive handwritten Japanese text at the bottom of the map, providing detailed descriptions of the regions and geographical features.







經緯度數之辨
 南北進退之距離度數者赤道以北赤道以南之度數也僅
 北極出地之度數南極出地之度數亦同又東西進退之距離度
 數者西天利加洲之口テシリノ島之内也界第一高山上用
 一ノ為東西經度之物點因是起ヒコ以西ヒコ以東之度數依
 於此ヒコ起極度物點而終同天三百六十度也
 東西之經度數記于南北之緯度南北緯度數記于東西
 經度假令與列南都矢起行正北之海中凡三十里所距
 一ノ之物點正東經一百六十度記之緯
 列南都矢起行正北之海中凡三十里所距赤道正北緯四十
 一度記之經之北極出度亦四十二度也
 寬政二年庚戌季秋下苑 本由三郎右衛門利明撰



Handwritten notes in vertical columns on the right side of the map, including geographical descriptions and possibly names of regions or features.



Large block of handwritten text in vertical columns, likely providing a detailed description or legend for the map. The text is written in a cursive style.



Large block of handwritten text in vertical columns, providing a detailed description or legend for the map. The text is written in a cursive style.

Large block of handwritten text in vertical columns, providing a detailed description or legend for the map. The text is written in a cursive style.



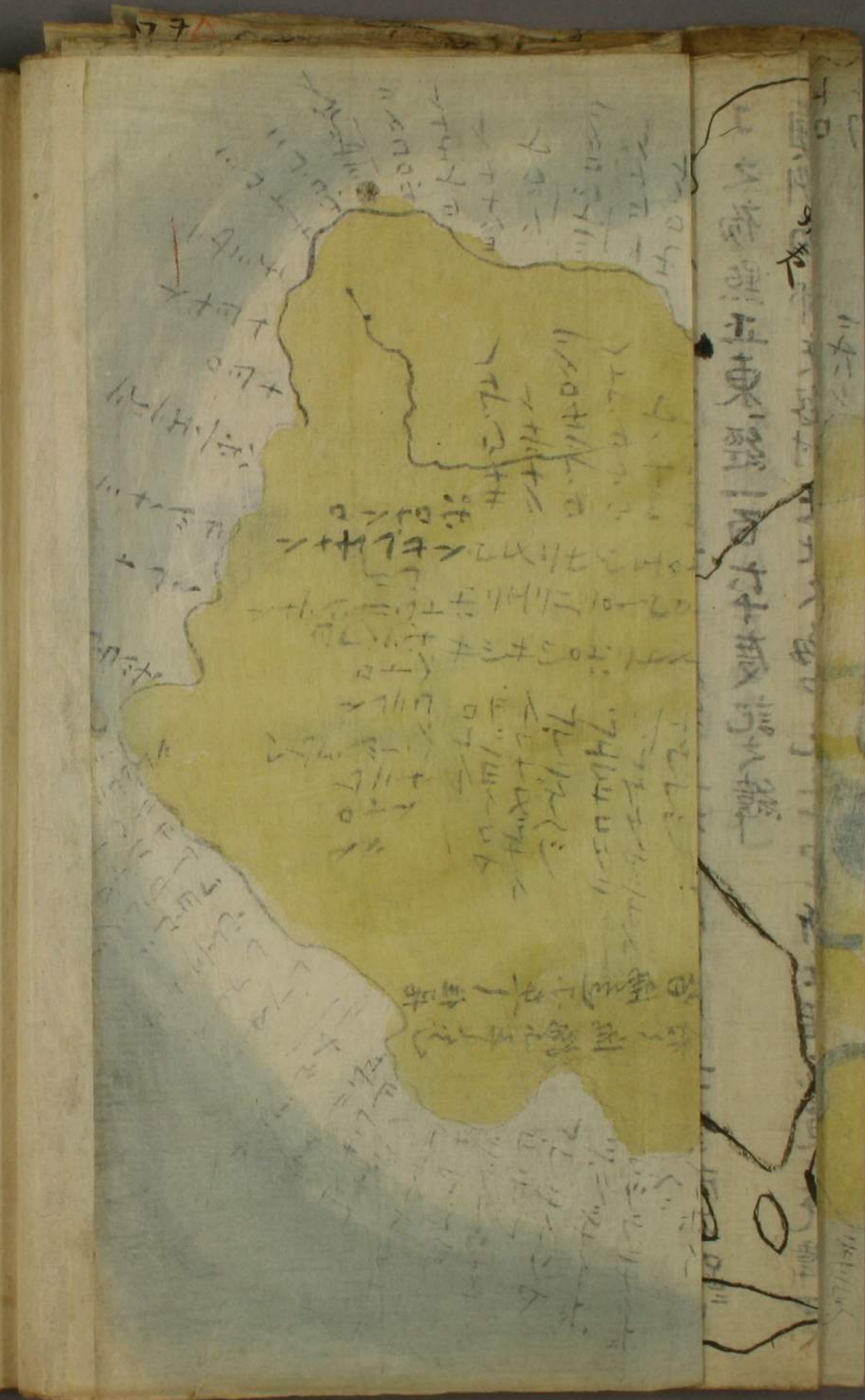
圖款如圖字也

字號 經四十三度

九龍泊
廣州

經四十三度

此海嶼以嶼嶼地... 經四十三度



Vertical text on the right edge of the right page, likely a title or a section header, written in Chinese characters. The text is oriented vertically and appears to be a title for the map or a section of the book. The characters are somewhat faded but appear to be "東亞地圖" (East Asia Map).





Handwritten text in Japanese characters, likely a title or description of the map, written vertically along the right edge of the page. The text includes characters such as 'オランダ' (Netherlands) and 'イタリヤ' (Italy).



假尺半線

經百七十度

緯六十度

蝦夷地

オホshima

サハlin

シベリア

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

オホshima

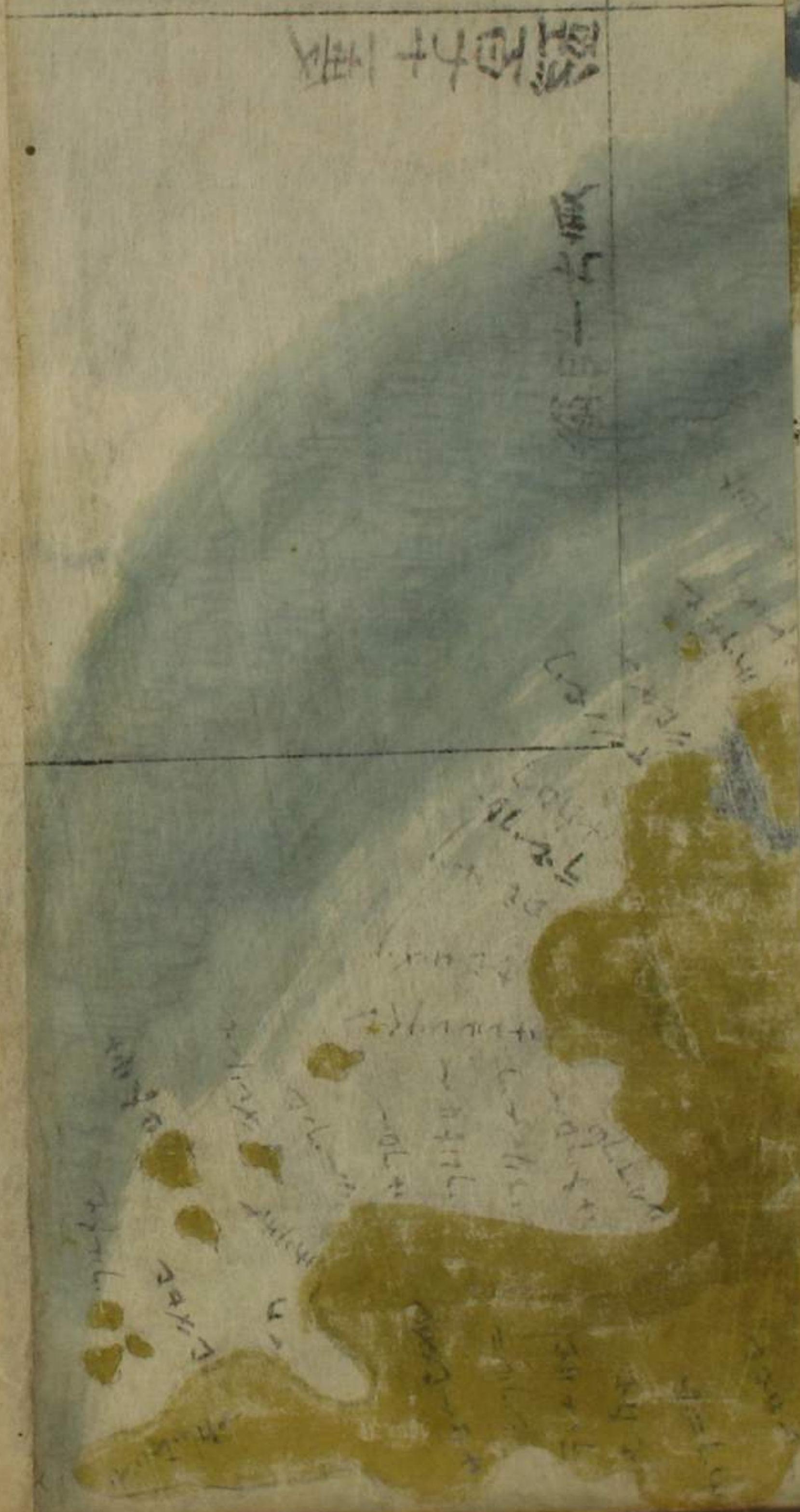
昭4
327
1



蝦夷草紙

凡例

松前所至一島の内群を領分とす一島の内
 とす一島内と臣代場本とす一島内とす一島内と領分
 とす一島内とす一島内とす一島内とす一島内と領分
 十里位一島内とす一島内とす一島内とす一島内と領分
 の内とす一島内とす一島内とす一島内とす一島内と領分
 絶つ深山曠野のくまり一島内とす一島内とす一島内と領分
 とす一島内とす一島内とす一島内とす一島内と領分



此船の運上令の多少を撰く許容有り是等船
仕負ふに小仕負人勿具船中、通運役と云能人と番
人とをせしむ之は皆雇人あり可也其は亦其船前
群集せしむ干場中、年々價を産しと其外品を
を大船小積し送り其場中蝦夷土人共其採り
揚る上産く交易せしむ其大船積入して船前、
啼帆し諸負の立人又はを諸品、壹辨價金銀
年錢少しある之を抱し其場中の交易せしむ之通
初之能人番人其假住居し少産を運上るにふ

唐の御年

○此船家古年領角を仕負人及領を系自多領
地此政事ハ勿論境界と廣狭とあるを年々蝦夷地
侍ハ其人其仕居せしむ之佃ソウマ、アツケ、クナシリ
是ら亦仕負人年々酒及法点を積送り右船
便船をく上系役と云能船前最良人其船中其
場中行き、云係船中ノ捕魚皮雇鳥羽鴉尾
類を交易しと場中仕負人の商船は日修積送し
由帆し耐る小上船後も停る人領との交易も商人の
交易も日修めく年々酒とたを亦少同物と云

土産物を其の地より土人も其の物である近所の
土産物を出して少く交易せしむ

○領土家臣も亦領地を兩人の任負の者にして
運上令取上く是を租税とて領内の土人の年貢
を以て任負人の方領内の土産物與て其の
自分家内納の又用たす租税とて之を揚る是を
指すなり

○蝦夷地中の任負人少くせしむるは任負人の
者の少くはく一き用事も少くはるる他西の人
勿論後松前土人も揚る不蝦夷地に入る交
停止

○蝦夷地中周囲の湯道ハ蝦夷人住居せり地中
不到りてハ蝦夷人住居せり依り阿闍婆人
跡なき所あり

○蝦夷地中造り道ハ古き事之は少く少く通る自然
の道あり及路之蝦夷土人風俗を踏み進み高き
るく道なり不狭く僅か寸をり幅之海路を以て
砂濱を道とす

蝦夷地は都の穀物の積を揚海。年停止は故不
耕作の道場なり。位々田畑は冬月を以て初秋
草前栽を好み秋冬牛房山跡小自然と云ふは
蝦夷土人の食事を事を知りて只奥肉軟肉等
常食と云

蝦夷土人都く食物をたぐる事も服を不用櫛一箇
少隈く菜は不用味噌塩に代るる肉軟肉草根
木真氷こく煮く食は適し海水を真氷小交く
塩梅するも稀に有る食するもたぐらぬ物の
多く有る。終日終夜喰ひ續け又食物の多し
二百も旨も食事をたぐるもたぐらぬ故食物を
欲する事あり

蝦夷地都て一村といふも家僅小五六軒七分
又八箇小十軒も有る本を大村とて一稀あり之
蝦夷土人都く住居小家宅ありといふも一土屋の
住所も定ぬるかせき小出る所ハ家族を連れ伴
ハ異財を携へて行末を離れ已つ家宅を六九
けりかせき小出く其先く小梅屋の向る亦

假少加をトク住居を定むるは是搬夷土地の風俗に
擬するに春夏秋冬を少加と稱す此の俗は住居を定むる
の區別ありと稱業を定むるは年中四季を少加住居と
稱す此の俗は住居を定むるは年中四季を少加住居と
定むるは住居を定むるは年中四季を少加住居と

○家化ハ早中を分て地連す一軒を切
て果を定むるは早中を分て地連す一軒を切
ぬき壁なく草屋草を用て墻を切農民の守
舎此れ一方二間ぬを分て家化を定む

○搬夷土人皆草履草鞋を穿て蓑笠或石を旅
路に赴けどもアワシの草物を用用するもの亦有各
たる物を用用或ハ繩を以て蓑笠或石を用用す
旅行の道具ハカコウトソめて火少道具の提物とら
るる手せり煙草入等け物の多し

○搬夷諸島金銀錢の通用が土人土人の交易
ハ大カバハ少道具尖筒の類を以て交易を定む
是亦ハ他島の宝物とす物よく山奥小右切小
秘飛止るもの土人々お前人の交易ハ日御産物

の年輪 價は保古を成り又古銀財物物取す
蝦夷産物も他に賣れり交易する之日
この金銀錢の通用するは家富なるは
皆そ同き一ありて物積り貯る事なり又年
貢租税ありればかせき亦お情なき事あり
戲して日々を暮らす名利名聞を離して是れ
安んじたる境界なり

蝦夷地は馬文字なりし歴はるるれは吾れも
年月も知るなき世なり父母の没たる日朝

初に古く歴代を辨する事何と云はれ
十年代も教を授けしを辨する事も相互
終を以て引別びしよし正し何箇年以
し事更ふに之れは此の前の如く
有る事なりしものなり又事四年の寒暖を本
歴に修ひし事なるは出役或は草木の枯槁
警戒式ハ鳥羽の律令を以て知解する事
を以てありし何れありて其節氣を正し
知る事何と云はれし事なりし何れありて

を給ふ人見蝦夷此邊風と

松前の城下此所人地下侍りも若七人何れ目
見し西人より少く若七人何れ目見し西人より少く
此役成りて菅野を獻す其故は古領主の物と
松前小浜海へ蝦夷人の伏候せし時小若七を
成りし小屋小假住屋せりしなり其邊風小若
〜此賦物何りしなり

上野園カミノより村分柳を割く存すを小若七に
せりしなり小若七に編くを連松村に託すなり

たる木は此處にありし是を馬場校中と名付
毎年拾遺宛献すなりなり毎年十月十日
若七割の所役候なり一家中地下侍りしなり
寄せ集めり事終りし神祀及酒造給ふなり

根煙くま

松前領主の東都へ奉觀此時津持此灘を渡海
の事定例より長者に松丸より小舟に船乗り
松前此泊を國帆へ津持に馬屋の向小浜り刻り
海上に舟を小舟岸何れ津持館の岸鉄材の清八

ふ、頼師の定役して、狼煙を上げた海上に、事小を
存せしむるに、頼と頼前、先ヶ知し、むおあがり
頼前の白上宗、此狼煙を見て、主君のまゝ三馬を
よぬ河し、をかり、此白上宗も、おあがり、頼を
禁く、此毎火を見て、頼前城内より、又、頼を禁く
入宇、後白上城内より、宗の火を通し、後宇、後
火、北清を、見て、白上と、城内より、宗の火を、清と、
此狼煙に、頼前と、清と、頼師の好し、よ、頼と、頼
頼と、頼と、よ、も、無、用、と、なる、事、に、頼前、頼と、

頼師傳ハ、昔より、宗と、頼と、頼と、なる、事、

和太、この、事、

頼前、不、和、大、と、り、事、あり、清、頼、外、に、頼、不、頼、前、に
頼、前、に、宗、中、に、風、烈、なり、海、中、絶、ち、事、毎、に、荒、海
を、隔、て、孤、島、に、宗、東、部、に、遙、在、り、宗、を、れ、に、頼、事、不
ぬ、り、に、頼、事、に、宗、を、事、之、依、り、頼、前、に、民、何、事、
宗、島、不、和、事、に、は、頼、事、に、宗、を、事、に、頼、前、に、と、事、
萬、年、の、工、月、に、事、不、和、事、の、元、旦、に、頼、前、に、和、事、の、大
頼、前、に、是、を、頼、事、に、宗、を、事、に、頼、前、に、和、事、の、大

丙午正月予お前を若くして蝦夷地へ赴きし
三つ石よりお前不到也。お前の町人太田富太郎阿
部伝次等よりお前居たを以て曰南年元旦の登
以天候小周のみくお前より依く蝦夷の土人太田
路地へウメゲとて時のあそを何とて號し事類を
何れぬ天候ふよつてわく何れとらうとて其を
の内を略曆を以てお前へは送く之を景日食
する事をありとてお前へ依く近村の疑惑
を解きしり。又お前蝦夷地へお前を路次とて

彼回各曆を以てお前へ元旦日蝕ぬ事を以て
蝦夷土人お前へ疑惑を以てしり予思ふ所
此等小用國最一の國とてお前へ補ひを以
とのに可等代事と

越年役の事

蝦夷地のお前地とて日本官言分りてお前と表との
如く表にお前とてお前蝦夷地之先お前と表彼
と江指し今くらお前地よりお前とてお前の港之
諸を以て高船輻湊しし艦を以て碇を以てし

宿る本之此ら所共宗仲れ口者所とて是亦何
て者亦かく流玉のあへ廻船を政る若は海の人
于廻船不あり事れは仲れ口者本の有司事とて
是を礼一先うて世の武士處に信廻せられたる
らんとて返る者歸り老等より上陸を許され
真不逐房とて外懸者諸職人等松前地にお
しをそのに細細を許され他も老れ細細を
稱業代目雇かせしふとて松前地不細細を
之れに政め事後とてしめて課役地を政る人

を出され又日月の首近敷夷地松前地にお
居る者にも後とて惣方百人の課役を政る人
日月の日後他も此人を捕ふる是法に其年の
其宗海りも老を政るて老の由之て惣方を
めて押し出さる干制を何と事れは日月の秋
冬に渡海かせき事にも事れはは言れ人松前不
序政せられも是を費しとて老より松の長は
中嶋も言信らりて余も海りより海不百姓家
の信をまるとを歳一とて停止此を毎年々政の政を

鶴と鷹をえたる年、百姓は家数も増えたるを
小年と名づけ、價もさうなり止りて、
の物終へ天の年の定之、年と角七月常盤
をたれ馬つと予、王様おす辟易とす、

鯉漢をくらふ事

おちとて毎年節もさうらう、妙をを断主、月
十の夜の燈の内、天に上公際、
のぬく、
晴一候い、是る、
は、

おぼも、
は、
今、
百、
は、
新、
唱、

鯉梅をくらふ事

之を因窮の上、又も因窮をさす、
の事、
は古の内、
は、
之を領土の令せざる所、
嗚呼時勢をさす、
之を領土の令せざる所、
嗚呼時勢をさす、

耕作せざる事

上古ニ至ル降民を教育せざる耕作を以て本業と
因分りて、
を天下に教もとり、
道を以て庶民を教育せざる、
所至鴻れ一國、
アワサフ、
河筋、
七村ハ畑作を一業と、
家ハ其種業を専務と、

一跡

此を第一の業と云余大野村の各村儀を備へし
 百姓の宅小旅帯せし時小耕作の年を争て國小
 荒起をせし時予問て曰荒起は如何の
 故と云答曰秋薄旱の故也云々一唐路を夏
 の土用中小耕作をせし時八月廿申旬に放火と號
 拂ひ翌春小耕作を鋤を以て畑を是を乞て荒
 起と云ふは初めは年々小耕作地も給り同
 じなり云々年々給り給り後小土地を乞て給り
 給り云々云々是を給りて又仲の所、荒起は

入りぬけ給り給り小細を起し自他代を割り
 又唐路の定年なり云々云々年々小一なる領主
 台檢地何とて牌を打地不取何とて年々
 云々定年云々云々檢地のたひとて地不取割
 小増減何とて云々云々路村迄の畑を以て
 此の地を以て年々給り云々此の地の租税
 凡檢地を以て信託と云々此の地の租税
 なる所五町七町の年々何とて路云々云々
 給り給り小耕作田を以て何とて年々與合を乞

升くは後々唱ふ又古細を於て其起を後述ハ
こや一を以て我而創るを此を之細を穿も種
を解く後ハコヤシ菌をせん転コヤシもせん其をたるの甚
もせん只化し檢すくも新創らさるるを其
可系終ふ土地廢て同創らさるる百姓生國
依依の老之依くたるの轉化の種不耕しては
此と及ぶるも老れ曰依依其後等れ耕化方し
隨ふ其をては其れとも其國其智して菌も用
和りもく回教多く其を其を其を其を其を

略る耕作を以れも家族の事良育も事足り
りれハ故て其の事いふ農業業ハ其限り其
教通するに於て育等れ令るりれハ少民其情弱
曆世の常之是ハ其國の土地の時勢也

新及田細の事

所代及力石款之也一ノ人の羽刈村山郡東
根利といふ村系を新及田細にせし時ハ初年ハ田細
たり教實檢した其年百姓え心力を其せ
て其檢一其れといふ年を遂く心力其

りぬ今既小上田上畑と云々一丁代を言はれぬ
多しなり之を不松系を四五里ありて移居せり
村有
け村地ありて此等秋耕業一々土の上田を必
所向れ、鎮まの命向り、津所を此百姓を
完と耕化せしれ、不松の教定給ふ、即ち年
大儀より出せり、一々年月、旬年不順あり、
こそ鎮まら回作をたぬられたり、一り移居村の
何某等、小安を物終る、一後鎮まを始む、
ゆ、此松前所を二箇中、不松教出せり、
一

はり、一り予於此北極出地を測量せり、
二、三、四、五、中華の北京、氣候、小稍似し、
依て百穀百草、出せり、
も向る、一々各、一々及、
扱撥夷の土地、
治者人民、
地、
の、
し、

穀の稔くさるゝことあり又日中申ともは山
 幽谷よりさる雪を務れ絶つるを以て考へる一
 其申をてても解き在の枝葉小の日光の
 には此枝葉を濃く透し漸く微温地面に距
 るより土地西は涼なりよりして温年候
 多長申とも温暖石到固く北極をたお應
 小四時の行はしむる候也

江指近在箱館近在馬く畑をゆりて
 大なる雪を稔其角を甘菜大根を程を

升何よてもお應不出産せし高待よては米を極好
 せしものこし余は幸奥蝦夷地通路下時小
 アツケし小くもねまふ東ふりて岩餘里有
 此アツケし運上山をめぐり夕の連ひ氷山の根
 女に清水有りて此清水を取運ふ不し余は
 て是る不運出る泉のこい谷地ありて程も耐なる
 もかくて自ら不し下りて程の稔りたるを以て
 之是別粟稗の出産するれ極之れ不彼は
 法より蝦夷地より穀物の種子を伝はる

停止之とてあるを以て是は嘆く所なり
也や竊小考ある小蝦夷の土人農業小力をも
して小土産の千束等の漫獲して土産をお蔵し
たりあり日本地を以て捕場は負人の言葉
の良も石を運上令もお蔵せんとの有ぬる一
度幾ハ蝦夷土人小粟稗を始り百穀を作り農
業をかせむとすの利益を多しとせし良民
入良民とある所は必然なるに因てあはれ時勢
を風化して人道不深しむ計事は何れを以

ふれハ後れ君子是れ也

牛馬之事

杉前所至鴻一國ハ牛馬を飼ふ所放し飼
ふ之其分秋ハ青草枯草も何れも食用小飢
以依く曠野曠原小遊ふも小飼りて雪降と
積進ハ雪中分乘る薄の積もて氷喰ひ居る
も極寒の此小飼るも雪小積りて居る積
も積る雪不埋りて食物も絶くぬれハ遠道小
出く遠く申分は復小飼られたる海藻を拾ひ

食ふ上人其時をゆる馬成取集く言れよや
と後ひ其用ハ飼養ハ干草とて毎秋小刻干し
貯せしる蓬交リ此草をとりて之を北
も花をれも馬に剛強なる事見ゆ此馬北野
豊之用を當とくは山坂北山名嶺之阿市を
履くをきしも女も印もゆり余も西去西去
下旬長古内より少村小高せ一時宵分明日の意を
をれきりし不暇之羽少ぬて馬を牽きしり依て
其後を尋く不即不を解し其後をとり教を

を國不野教少飼養たり馬成取の捕く事不彼
馬の意をゆく山へ逃ゆたりなり夜中不地
たれハ行方少むかひたし不野不人來りて云
其馬ハ山野程山奥の深き少たしとてあせしる
依くしと見又捕く事きしたるも一とる驚くは彼
馬ハ山より予を向て行先を死るう道出ると
人の風俗を見よ太古の風ハかくもてをり馬子人
少て馬を女牽きた運しと牽けりしを見よ屈曲
北山路少人足も安くく陰四乃山坂等を往りし

小敷くも是は又子と違ふて後迄不出く通りし
諸小飼馬を是々くおせ遊ひ居るを見たり馬子我小之
くは暫く馬註て御兵へおせ諸端なく余
も注を去て馬をそめて御兵へは彼らも諸端の馬
を控へ一統く見く居たり余も實不見ひ其致を
同山時小馬を某のうた日解り以余も跡放し此を
たより尋ても未見は因て諸端の馬某北馬少能
くは是れを捕く見れは某の馬子何れとて余をひた
りて同小馬を某へ送ふとれははらせたる居れは
は

小何りの尋あつてとり扱又牛は松前最寄の浅
急はふし所ふふ女を何り後ハ漸くと殖産記書ひて

監竈しんなん事

松前ハ千島地急を圍産のかせ記とてお地な事は
日中地ハ地のみく入る事たふ吳之依く松利有種
地を定一とておし之を不預人まで蝦夷地及び
報中多く何れも立禁お折る所を六地禁を此事を
國を立し庶人の善業を治し自給と領主、裡役
をみ居ます。此小南なる事ハ地境の免許の事を

八幡宮領主の祈禱所にて年中毎朔神事を奉
むけ社少隔年程ふ八月十日ハ多礼之此時庶民群
集あつて相之辨り天北海奥七社といふ神有け神
の正奥と隔年小松前西中を以廻り定例之重松
前北橋を境とて南七の西方ニ中ふあり南七
海船を以廻り傳りて飾物を以て北山成
化を以て飾物成りて南七を以て俄在言
を以て負ふ人者しして更其地を以て又上野園の
八幡と同名の毗沙門天ハ正南東領主代事あり

又多踊小ハ十歳以下北老踊ふ程ふ其節有て
老も男女終夜是物不出十日十日迄毎夜
音頭を以て踊りて西中張あなり

地境ノ事

松前前在迄之國の内地方を考ふ其叔親疎の二歳
有り先松前の百姓を傳居居る所を土人名を以て
シヤモの國といふシヤモといふ人同といふ事之又蝦夷
土人の住居所を以てアイノ國といふアイノ事
蝦夷といふ事之日也近江蝦夷地或曰蝦夷

とつひを地蝦夷地は奥蝦夷とつひを口蝦夷と
奥蝦夷と分界しつて只を此に是を有のこ
其線の形を八割草に取らして側を物之位
口蝦夷と奥蝦夷とを辨し合へ又跡の形を八
扇を羊用ふ似てパイノの國とシヤモの國とを示
し合へぬ口蝦夷と奥蝦夷とを辨し合へ八割
草中々くひれし形をこつて越へしつて
山を此道路と此山は道と示すのち口蝦夷
地とつひ又遠方を奥の蝦夷とつひを示すパイノの

地とシヤモの地とを年々し羊用の扇の形を
似たり要の所は示す骨の形と示す所は
シヤモの地の地の道はパイノの地の右の角は
メナシ左の角はソウマの角と示す二形を示し合へ
家を示し西の方を西蝦夷とつひ又上蝦夷とも
しふ東の方を東蝦夷とつひ又下蝦夷ともしふ
國中各西をよつひ東をよつひと
お前所を此の國自ら蝦夷お人の住居とく人は
通路と示す地中示す所は東の地の形を示す山

4
中河を海北流口に遊きて大船何隻も入る事能
らん又東蝦夷地ホロハワの場ある内ホルハワと
よふ中川有け河上を尋ねる四五里程山奥に流
る山をたてた水は濁く清く事なく信長は浅田山の
如く依り其邊に一圓の温泉湧き出く谷の分る
集り一河をたて此ホルハワに流す也此故に此河
の水色は白く濁く流すを極く濁く事なく如く俗に
青帯をたてり水は濁く河をたてり水帯を流す事なく
濁りて一寸も水底を見や事なく又上サシと云ふ大山

河に其山の下にスカエ河と云ふ河有氷色は清く
冷やしく味いさく酸く澁く此山は硫黄の礫
多し依り其邊にけ河に流す事なく如く
或人の説く石膏蘆根石も河にあり我と云ふ
余も見ては其肉と云ふ村有此村の山奥に温泉を
其傍に毒水湧き出く流る鳥獸も多し其
け水を飲めく即ち此山と云ふ
ウルツラ流す北方に千リホイと云ふ流有け流の石
此石台層地也其泉有味の酒の如く白く好き

ナムシヤとらふ事

往年余蝦夷地を思の見を常用とらふ者自
ちくと北東蝦夷地を巡行を既ふクナシリ迄下り
し小蝦夷の習ひしてナムシヤとらふ事を信ぜ
けナムシヤは高賈の宿客をさる宗北谷原に其
のちを扱蝦夷土人の内ふし名と少使とを役目ありし
日本の名を組以つて扱ふにけ者とも日中れ有司
目見にれ時ふナムシヤを真行するに定例に此時日本
の土產物を与へ酒を振舞を蝦夷土地の定例とす

高賈
高貴也

時ふ松前所在の同アウケシの小使シモナリツカテス
し名シヨニコ及クナシリ鴻のし名サンキナ服し名ツキ
ト等々を呼出しけ者ともはクナシリ迄近來る餘里
を隔たる所の海邊場下のを立たる長蝦夷土人の
扱け者夫れ物名事の下名ハナシ小蝦夷のアウシ
と申して日中のを布小似る物を乞へ其上小日本の
小袖の川解きの字物を乞へ或は領主台場りたる
番地の蝦夷地の所お嵐物を乞へしり時ふ松前
土人小通利とてけ通利小蝦夷土人ホト成事なれ

鼻の下の鼻をさきいひつて酒を飲む是近親
蕩くことと跪中一居れも例く酔ひぬれは座も
家もね動はし羽を依有司の山玉座とを付て座を
廻り動儀酒を杯持筆と回宗くこと席
も後飾りてらふこと於是酒の告ふこと山玉座
を告の告ふこと名酒を戴くこと名酒を流流ぬこと
領解し忍教く頭戴はこと是皆千ムシヤの
法或は此れ例て座席を返さ戸物不出く揚り物
を兼ひ候ウラカしつる時小方司下新くから下り揚り

を六途申分申す持内の酒の度々々と宿親ふ小指
を入く標り嘗て如也を減く端の物衣申のま
し酒杯をかつき蝦夷は旅者申ぬること蝦夷申人
の性ハ初めハ歳くこと終りハく月也いふ者人
百事下端皆是ハ準よる人情之習見の禮ハ
歳くことなきて離割の礼ハか

對面の禮ハ事

此系先見駈けく往る時初前在給東蝦
夷地アツケシのし名イコトイガ申申申申申

六丙午に及ぶるアツケしを右帳に下口口為の真
しヤルシヤムとしか所ふ日年を月をのふと名を付所の
乙名てウテカアイノとす此者も南の甲ふ名も地
大身ゆゑ急略ゆくも人たふ思也致少老之時
イコトイは集り舞多其食座ふたふ湯酒を
ゆり舞留のふあふゆりゆり懐を西を東を
の酒妻有余も其舞のイコトイと無ふてウテカ
アイノが宅ふれきけふふ亭てウテカアイノは上
座の隅に居り舞は宿客イコトイは座のたの隅

舞は於是相互ふ致てとて言終成者せん暫く
有りて家も長美進しあゝ舞はイコトイも按
おつりれた千ヤアラゲとて蝦夷の物り口上り後々
そそとしかけ時ハ卒日の云々ふとたふ差へ耳一を
一向ふおとれ只能く舞く舞るのいふと分お互ふ
席ををとりあひ四男と女と額額を宴会を
たふの子とて集り舞をば集りあふ集り舞
をハ集り押してお互ふとて感涙涕泣はとて
良舞へ感涙涕泣はとて中を退れお互ふ

ユウツギロツ。アカシトウ。クスリトウ。ト等ハ養々出
 たる地之甚外アツタトウ。ユウトウ。トウブイ。又チリ
 流の内トウツ。エトロフ流のニヤナアト等ハ山
 新々あり記述ス。遠所ハ又湖水ハ松本
 流の内アツケシトウ。チン子トウ。フウシトウ。此等皆
 海水由来トシテ湖内ニ満ちたる白鳥鴈鴨
 等あり又能多クト外蝦夷地ハ山
 多く湖水沼池等も多クト云々余未
 見ハ知ル



